

福田誠治¹著『国際バカロレアとこれからの大学入試改革 ～知を創造するアクティブ・ラーニング～』

(2015年 亜紀書房)

文教大学での国際バカロレアの可能性を探る
International Baccalaureate and its Applicability in the Universities in Japan

評者 大久保 俊 輝²

Toshiki Okubo

国際バカロレアの認知度が極めて低いという実感は私は日頃から持っていたが、本書の中に記載されているこれまでの経緯や差し迫った大学入試改革について、その情報をほとんど把握していなかったことを猛省することになった。

先般、発表された学習到達度調査 (PISA) の結果で、日本の科学的リテラシーや数学的リテラシーの平均点が加盟国の中でトップクラスとなった。また、国際数学・理科動向調査 (TIMSS) の結果と合わせても、課題は残しつつも日本の理数能力の高さはある意味で証明された。

但し、客観的に奇異なことは、「学ぶ必要性」を感じているにも関わらず、「科学の楽しさ」については、感じていないことも浮かび上がったのである。すなわち、近視眼的な目標はあっても、生涯にわたって学び続けるという「継続的な学び」ではなく「手段としての学び」で終わってしまっているという現実も認めざるを得ない。また、最も深刻なことは、PISAで毎回のように取沙汰されている「自己肯定感の低さ」は、一向に改善されてはいないという事実がある。結果として目先の優位性を得るために、ただ知識を覚えて、成績を取るという生徒や学生を私ども教育者は、育ててしまっていないだろうかという事である。

では、どうすればよいのか、私はその解決策

を本書の中に垣間見ることができた。この抜本的なパラダイムの転換こそ「知を創造する」アクティブ・ラーニングに他ならないのである。

本書は、そもそも論から具体的な実践までの成果と課題が整理され、章立てされているため読みやすい。国際バカロレアの教育目的は、「多文化に対する理解と尊敬を通して、平和でよりよい世界の実現のために貢献する探求心、知識、思いやりのある若者の育成を目的とする。これを実現するために、学校、政府、国際機関と協力しながら、国際理解の精神と、厳密な評価の精神に則った教育課程の開発に取り組む。これらの教育課程は、世界各国の子どもたちが、自分と異なる他者にもまた理があることを理解するような、行動的で、思いやる心を持ち、生涯学習者になるように働きかけることである。」としている。その教育課程は、国際性を発達させることである。としている。

著者が掲げる「知を創造する」には、知を生み出す喜びが伴うものである。では、私ども教師自身は、こうした「知を創造する」授業を自ら経験してきただろうか。そして教師として生徒や学生に行っているだろうかと問わねばならない。確かに国際バカロレアについて真摯に議論できる者は、教師よりも経済人が多いのも確かである。また、「知を獲得する」から「知を創造する」にシフトを変え、個々が持っている能力を存分に発揮させるためにも国際バカロレア基準で育つ生徒と、そのファシリテーターと

¹ 都留文科大学学長

² 文教大学情報学部非常勤講師

なる教師の育成の必要性と緊急性を筆者は本書の至る所で強調している。それは、ある意味で優秀な学生の在り様を変えることに他ならない。勿論、基礎・基本の素地の上で考える事ではあるが、日本でしか通用しない偏差値、学力テスト、学歴、就職対策などが大きく組み変わる時代が目前に迫っている。今の日本の教育は、先進国からすれば「ガラパゴス状態」と揶揄されかねないのである。と筆者は厳しく指摘している。

ヨーロッパ仕様の国際バカロレアは、国際標準カリキュラムの根幹に「探究型の学習」を位置づけている。そして決して答えがひとつにはならない学びが展開されていくことになる。多様な課題を、知識を統合し、創造しながら、主体的に解決していく学習である。それは、教科のはっきりしない授業から学校教育が始まり、知識を自ら学び、自分のものとして獲得していく能動的な学び方なのである。学校現場では、いまだに「やらされる学習」に終始しているように私には感じられる。勿論、そうして学習も内容により必要ではあるが、生徒や学生の受動的な学びでは、アクティブ・ラーニングは成立しないのである。安易に外見からの動きで判断するのではなく、思考が活発に動き、心がゆさぶられ、葛藤し、模索し、困惑し、皆で意見を出し、議論し、何とか解決の方向へと前進させたい。という内面から湧き出る思いに支えられて、傍観者のいない「深い学び」への効果的な手段を目指すアクティブ・ラーニングであると私はとらえている。

ちなみにフィンランドの教育は、詰め込み教育を完全否定している。子ども達「一人ひとりが社会とかかわりながら学ぶ」というベースができたうえで、他人と比べるテストのようなものは国際バカロレアと同じ、高校での事である。さらにテスト時間は、ほぼ1日1教科、1教科5,6時間をかける記述式で行われている。すなわち、最後の競争に勝つためには、途中で競争しない。という日本では馴染みのない価値観

なのである。と紹介している。だからと言って日本を卑下することはない。日本が積み上げてきた優れた教育力を生かしながら、多様な手法を用いて、コミュニケーション力を高め、異質の他者との価値観を認め合い、異質集団をまとめる社会性が備われば、日本の発展は期待できるのである。

最後に、IBの日本語訳は「探究」とされている。ある意味、教師は、生徒や学生を「探求」から「探究」の学びに導き、知を創造へと誘うファシリテーターとなることを目指さねばならないと、本書を読み進める中で痛感させられた。

数年後の大学入試では、入学枠の3割をIBが占める。だからこそ全教師は、このIBを理解し、実践的なコンピテンスを生徒・学生に形成しなければならない。世界は既にその域にある。

本年には、広島県に日本初の県立中高一貫校の「国際バカロレア学校」が誕生するらしい。中学校の定員は50名程度の見込みであるが、すべての教科を英語で行うとしている。意気込みのある教育関係者や財界人は既に具体的な行動をしている。

本学においても大学入試改革はもとより、国際バカロレア教員養成課程を具体化する時が来ていると痛感した次第である。